

研修会記録

「単位の実質化」をめざして

——21世紀教育センター主催弘前大学第3回FDワークショップ

中央教育審議会の答申「わが国の高等教育の将来」（2005年1月23日）は、形骸化した単位制を見直し、「単位の実質化」を促している。そこで、平成18年度FDワークショップでは昨年に引き続き、各学部の「基礎ゼミナール」担当教員から15名を選んで「単位の実質化」をテーマとして授業設計を中心に、「能動的学習」を促進するための授業方法について考え、効果的な授業シラバスを作成するための研修を行うことにした。

そうした趣旨のもとで、6月17、18の土、日の二日間にわたって、21世紀教育センター主催による第3回弘前大学FDワークショップが黒石温泉郷の落合温泉「ホテルちとせ屋」で行われた。初日の開会にあたって、須藤副学長、矢島21世紀教育センター長が挨拶を行い、教養教育の重要性、それに対する旧国立大学の新たな取り組みの幾つかの事例を紹介したうえ、教養教育は個々の教員が切磋琢磨する必要もあるが、全学レベルで研究、改善というシステムを開発し構築する重要性を強調された。続いて、大高副センター長が「基礎ゼミナール」の現状について報告したあと、土持副センター長によるミニレクチャーを行い、初年次教育の重要性やFDとはなにか、単位制とカリキュラムなどの問題について分かりやすく解説された。

今年度は、「単位の実質化」というテーマのもと、参加者がそれぞれ「多様な分野の専門家」で構成される三グループに分かれ、グループ作業、発表、討論を通して、授業の基本的要素や授業計画の実際、授業法の改善および授業の評価方法について熱い議論を交わし知恵を出し合いながら、実質一日半の短い作業時間で、「基礎ゼミナール」の授業の設計を行い、「授業の副題・目標」、「学習方略(授業内容)」、「評価」の3回の作業で、最終的に授業のシラバスを完成させた。各グループの授業設計に与えられた課題は、それぞれ以下のような内容である。

- A グループコミュニケーション能力を高める
- B グループ異文化理解を深める
- C グループ学問や社会の多様性の理解を深める

初日の作業Ⅰは、科目の副題や何を教えるのかを簡潔にまとめた「授業概要」と学生が授業を通じて到達すべき「一般目標」、成績評価の基準となる「行動目標」を決めることであった。初日は顔合わせから始まるということもあって、いずれのグループも議論を始めてから熟成させるまでに手探りの様子であったが、10分程度で早くも授業の具体案が固まっていった。



写真1. 研修会参加者全員の記念写真

Aグループ

Aグループにあらかじめ与えられた課題は「コミュニケーション能力の向上」で、和気あいあいのなかで議論が交わされ、それに、二名の外国人数員の参加もあってか、次々とユニークな発想が案出された。授業の副題は「Stop 三つのざる」、つまり見ざる、聞かざる、言わざるという従来の惰性を払拭しようとする狙いである。言い直すと、21世紀市民としてのコミュニケーション能力を高めるために、発信・受信・討論といったスキルの向上を図っていく。そのために、1) 人前で自分の意思を伝えることができる、2) 相手の話を聞いて



写真2. 初日会場の一風景

意図を推量できる、3) 生産的に議論することができる、4) 議論を通して自分の意見を再構築することができる、5) 協力して解決策を見いだすことができる、そして最後に、6) 報告書を作成し、書く能力を高める、という行動目標を掲げた。そうした行動目標のもと、一学期にわたる基礎ゼミナールの授業概要は次のように設計された。1回目は、オリエンテーション(成績の評価方法の説明を含む)、アイスブレイキング、自己紹介と質問を受ける。2～5回目は身近なテーマ例えばキャンパスの環境問題やタバコ、駐輪場などを取り上げ、小グループで調査し、発表、意見のまとめ、ディベートなどを通して、発表(スピーチ)の仕方を磨いていく。6～9回目は、捕鯨、コメ、環境、健康、マナーなどといったテーマを設定し、グループごとのプレゼンテーションを通して学生の間で相互に評価をする。10～15回目は個人でテーマを設定し、調査や資料の収集、分析によって発表し、ディベートをしたうえで、テーマに関するレポートを作成してもらう。このような授業設計に対して、抽象的すぎるとか、また2～5回目はいきなりグループでやらせるのは問題だという指摘がフロアから出たが、発想が豊かで興味深いという声もあった。

Bグループ

Bグループには「異文化理解を深める」という課題が与えられ、まずスポーツの国際大会の企画書を作ることを授業概要とした。授業の一般目標は、日本独自のスポーツを国際化するためにそれを取り巻く異文化について研究する、とした。そこから導いた行動目標として、1) 海外の類似スポーツを調査できる、2) 調査結果を理解し分析できる、3) 調査結果を発表できる、4) 異文化と関連してディベートできる(最終日に「バズセッションできる」に変更)、5) 良い企画書を作成できる、の5項目を設定した。討論では、白熱した議論が交わされ、スポーツそのものに対する理解よりも、企画力を養う目標を持ったテーマであることが強調された。フロアからは内容がわかりやすいと好評であったが、一般目標の実現可能性についても指摘があった。

Cグループ

Cグループは課題の「学問や社会の多様性の理解を深める」にしたがって、「健康を達成するために」という副題を設けた。授業概要は「病に対する考え方、対応の仕方の多様性を考える」、一般目標は、「病に対する考え方の違いが社会や地域によって大きく異なることを例示できる」とした。それに至る行動目標として、1) たとえば、風邪の対処法には地域差があることが説明できる、2) 病気に対する考え方の違いが社会や地域によって大きく異なることを例示できる、3) 敬愛的要素と考え方に関連のあることを説明できる、4) 医学というもの一つではないことを例を挙げて説明できる、5) 調査した結果を実生活に応用できる、を示した。発表では疾病の文化的多様性に関する模式図を提示するなどのプ

レゼンの工夫があった。質疑応答では行動目標の細部に質問が集中し、限られた時間の作業にも関わらず完成度の高さをうかがわせた。

引き続き作業Ⅱでは、作業Ⅰでの討論を参考にして各グループで15回分の「学習方略」を作った。Bグループでは、調査法の導入をおこなったのち、学生に日本古来のスポーツに関する個人発表を果たす。そして、学生個人の関心にしたがってグループ分けをし、実務経験を持った外部の講師からの講義を交えるなどして企画書を作らせる作業を行なうとした。質疑応答では授業の順番に関する質問が多くあった。

Cグループでは、資料検索方法についての授業、つづいて疾病対策の実務者で海外経験を持った外部講師による講義、留学生を交えたシンポジウムなどを織り交ぜながら、個人が取り組むテーマを深めていき、ディベートを行い、最終レポートを果たす、とした。質疑応答では、図書館ツアーやインターネットの目的性、ディベートの回数の多さ、逆にレポートの書き方の指導時間がないなどの点が指摘された。

2日目に入ると、土持副センター長による一連のミニレクチャーや前日の懇親会の雰囲気のためか、グループ作業はさらに活発になった。午前中におこなわれた作業Ⅲでは評価について議論がなされた。

Aグループは、授業の評価について大胆にも結論として「評価しない」という驚く見解を披露した。その理由としては、「基礎ゼミナール」という科目は大学生活への導入、担任教員と学生との人間の信頼関係に重点を置いていて、この性格を最大限活用するためには数量的な評価はそぐわないためという説明であった。そこで「合格」と「再履修」（敢えて不合格と言わない）という二段階「評価」しか用意しない。これに対し、フロアからは、一つの授業の取り組みとしてはそれなりに面白いかも知れないが、全体的に実施するのは難しいのではないかという指摘があった。

Bグループは発表力と討論力という項目を設定し、それぞれ25%の成績評価を与えたが、重複する内容ではないかとの意見があった。企画制作力という項目に対しては、企画書のどのような点を評価するのか、といった踏み込んだ質問があった。

Cグループでは、10%の評価を持つ最終レポートについて、行動目標に関わる評点が2ポイントしかないこと、出席に60%もの評価が配分されていることの妥当性などが質疑され、討論に参加することが前提である基礎ゼミナールにおける「出席」の位置づけにまで議論が発展していった。

振り返ってみれば、今回の研修会への参加者全員は、最初は多少戸惑いを感じながらも、いざ具体的な作業に入ると、皆真剣に取り組み、一日半にわたる研修をあっという間に過ごしてしまったようである。そして段階を踏んだ具体的な作業を通して、今まではそれほど明確ではなかった基礎ゼミナールという授業の性格、その内容の設計や展開について確実に一歩踏み込んだ認識を得た。それに加えて、初日夜の自由発表や意見ないし感想の披瀝もあって、個々の参加者はもちろん、大学教育の行政にとっても、実に実りの多い研修活動だったと言える。なお、当研修活動を円満に遂行できたのは、21世紀教育事務担当の方々の周到な準備と献身的なサポートのおかげだというのは言うまでもない。ここに記して感謝の意を表したい。

（註：『21世紀教育センターニュース』より転載）



写真3. 各グループが真剣に議論し作業している風景